

昭和59年沖縄県における主な感染症の動向

上原 隆・福村圭介・大城 博¹⁾・玉城昌信¹⁾

Infectious Diseases Surveillance in Okinawa Prefecture, 1984.

Takashi UEHARA, Keisuke FUKUMURA
Hiroshi OSHIRO and Masanobu TAMASHIRO

I はじめに

我が国では、近年、医学薬学の進歩、環境衛生等の向上により法定・指定伝染病の患者数および死亡数は著しく減少したが、反面、この伝染病に比べてやや軽症であるが、時折重篤な合併症、後遺症をもたらし、また毎年のように爆発的な流行を起こす感染症が注目されるようになった。

厚生省ではこれら感染症に対する地域的な監視体制を充実し、これのまん延を未然に防止するため、昭和56年7月から全国的規模によるサーベイランス事業を実施している。

本県でも昭和55年7月から23の疾病についてこのサーベイランス事業を実施し、これら疾病の流行状況の把握を行なっている。昭和59年におけるこれら感染症の概要を報告する。

II 資料

1. 沖縄県環境保健部予防課：感染症サーベイランス調査票（週報）及び関係資料
2. 厚生省保健医療局感染症対策課：感染症サーベイランス情報（週報）

III 結果および考察

県下33定点医療機関（病院14、小児科・内科15、眼科4）から報告のあった各疾病の週別発生状況は表Iのとおりで一年を通じて患者数の最も多かった疾病は水痘で、4,260人の報告があった。その次に風しん4,023人、流行性角結膜炎1,684人、麻疹様疾患1,477人、手足口病1,038人となっている。

月別に4週換算値で比較すると、最も患者発生の多かった月は4月の2,200人で、次いで3月1,944人、5月1,604人の順となっている。

1 麻疹様疾患

一定点当りの患者発生数を週別にみると（図I-1）、全国では第19週（5月第2週）に流行のピークがあるが、本県ではやや遅れて、第27週（7月の第1週）にピークがあった。

地域別では（図2-1）、本島中南部で3月頃から10月にかけて患者発生が多い。本島北部や宮古・八重山地区では散発的に発生した。

年齢別にみると（図3-1）、本県では1歳未満の患者発生割合（18.7%）が全国（12.7%）に比べて高い。

本疾患の患者報告数は昭和56年が1,852人、57年90人、58年154人、59年1,477人と、56年に流行して以来2年おきの中規模流行であった。

2 風しん

昭和39～40年にかけて宮古・八重山地区を中心に大流行し、多数の障害児を出し、本県では最もその動向が注目されている疾患である。

昭和59年においては全国ではほとんど流行らしいものはないが、本県では3月～6月にかけて昭和56年サーベイランス事業が始まって以来最も多い患者数であった（図1-2）。

地域別では本島南部での患者数が多く、宮古・八重山地区や石川保健所管内から北部にかけては散発的な発生であった（図2-2）。

年齢別では、5～9歳が37.8%と全国と同様に最も割合が高いが、10～14歳の患者数が全国に比べ本県では多い傾向にあった（図3-2）。

3 水痘

昭和59年の感染症サーベイランス対象疾病の中で患者報告数が最も多く、また、昭和56年2,302人、57年2,873人、58年1,969人、59年4,260人と過去4年間の中でも最も多い年であった。

1) 沖縄県環境保健部予防課

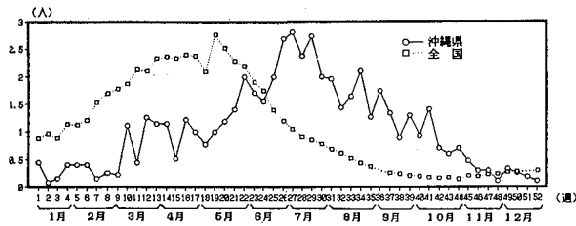


図1-1 麻疹様疾患

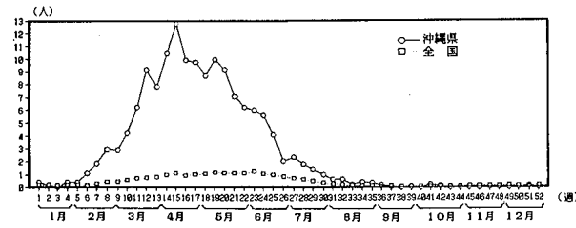


図1-2 風しん

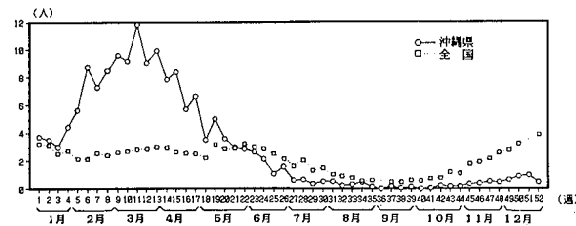


図1-3 水痘

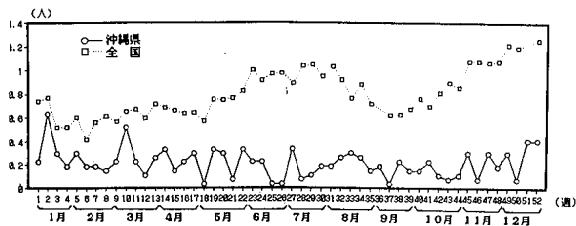


図1-4 流行性耳下腺炎

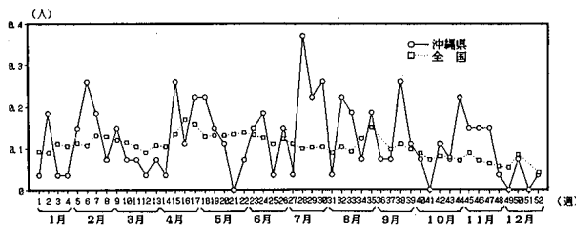


図1-5 百日せき様疾患

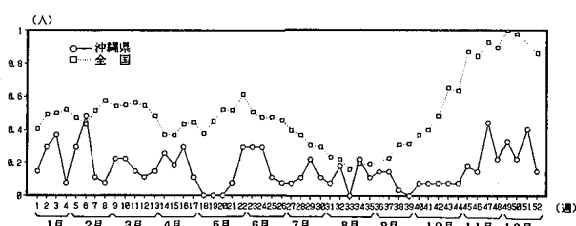


図1-6 溶連菌感染症

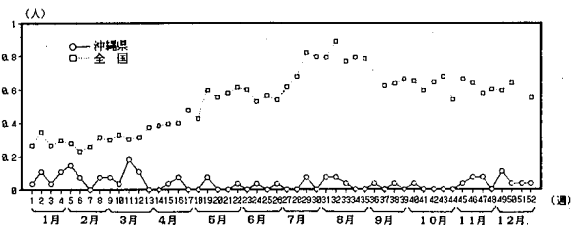


図1-7 異型肺炎

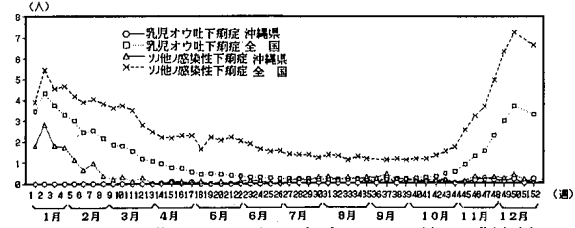


図1-8 乳児オウ吐下痢症、その他の感染性下痢症

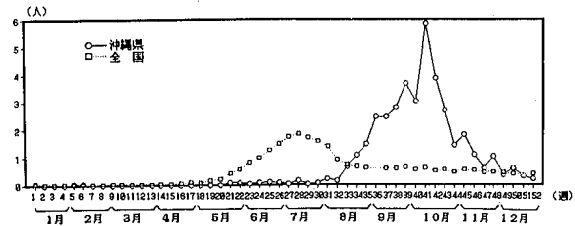


図1-9 手足口病

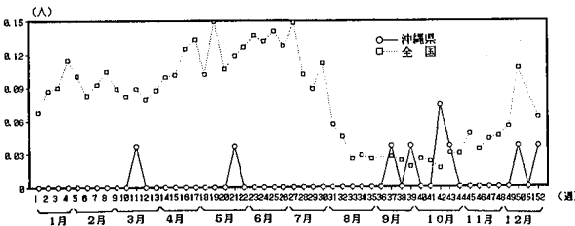


図1-10 伝染性紅斑

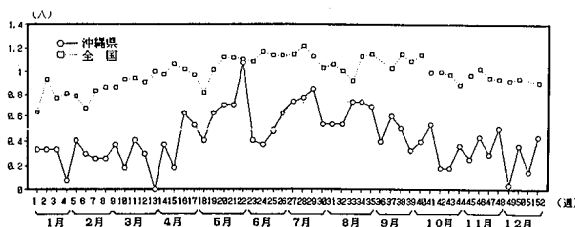


図1-11 突発性発しん

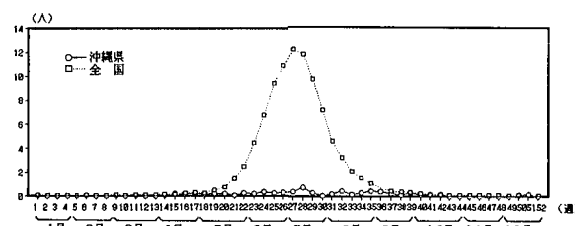


図1-12 ヘルパンギーナ

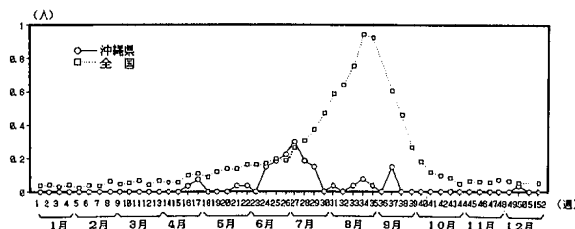


図1-13 咽頭結膜熱

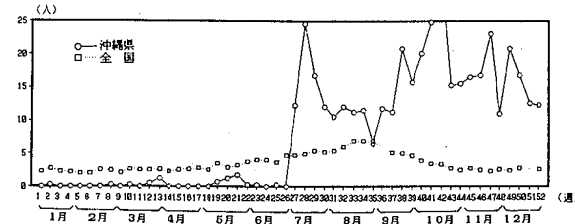


図1-14 流行性角結膜炎

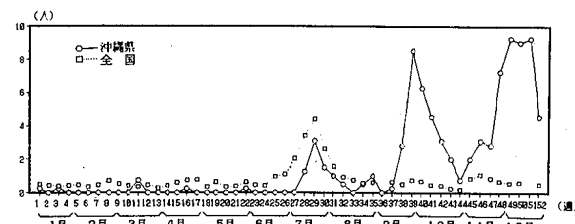


図1-15 急性出血性結膜炎

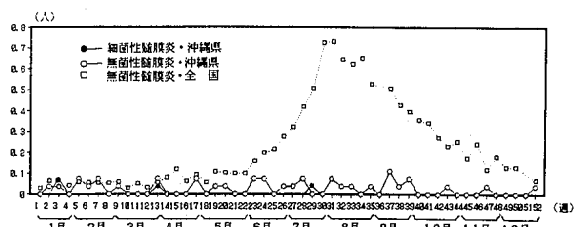


図1-16 髄膜炎

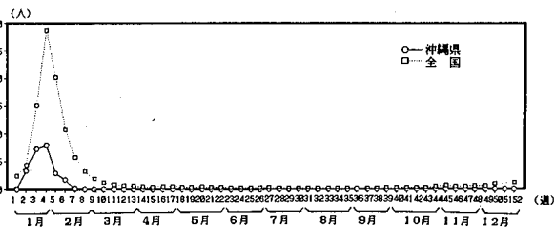


図1-17 インフルエンザ様疾患

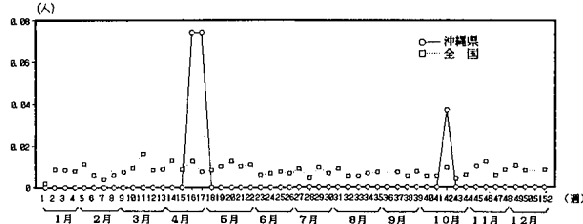


図1-18 ウイルス性肝炎

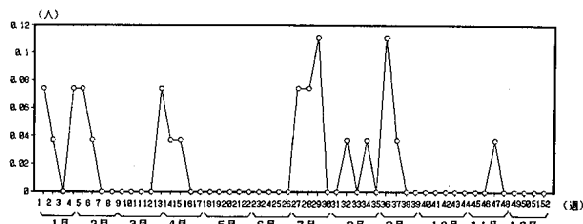


図1-19 川崎病

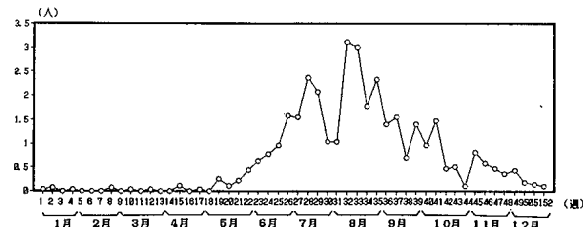


図1-20 伝染性皮膚疾患

図1 週別一定点当たり患者発生状況

全国的には流行のピークらしきものはあまり見えないが、本県では2～4月にかけてかなり大きなピークがあり(図1-3)、過去4年ともほとんど同時期に流行のピークがある。

本島中南部での患者発生が多いが、宮古地区でも243人の報告があった(図2-3)。

年齢別にみると、幼児から小学校低学年にかけて多く、10歳以上の発生は6.1%と少なかった。(図3-3)。

4 流行性耳下腺炎

一定点当りの週別発生数は全国よりかなり低く、昭和58年4月をピークとして流行らしいものは見られない(図1-4)。

地区別にみても、各地区とも散発的な少数数の患者発生であった(図2-4)。

年齢別にみると1歳以下の発生が全国に比べやや多い傾向にある(図3-4)。

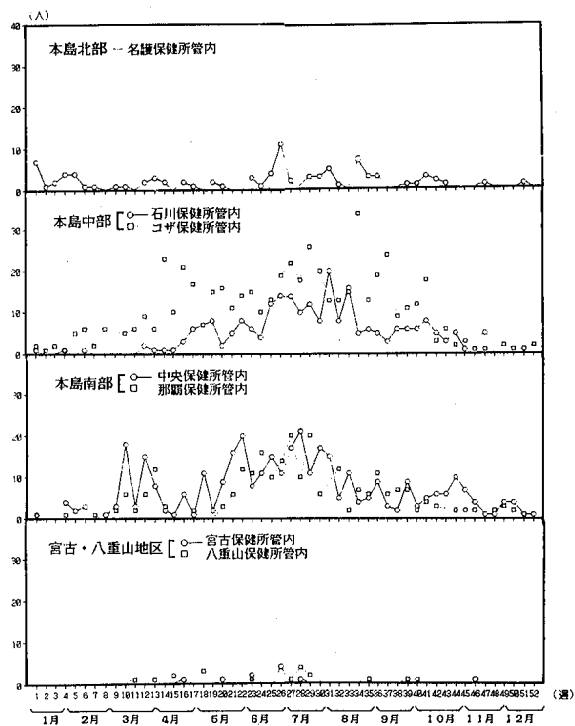


図 2 - 1 麻疹様疾患

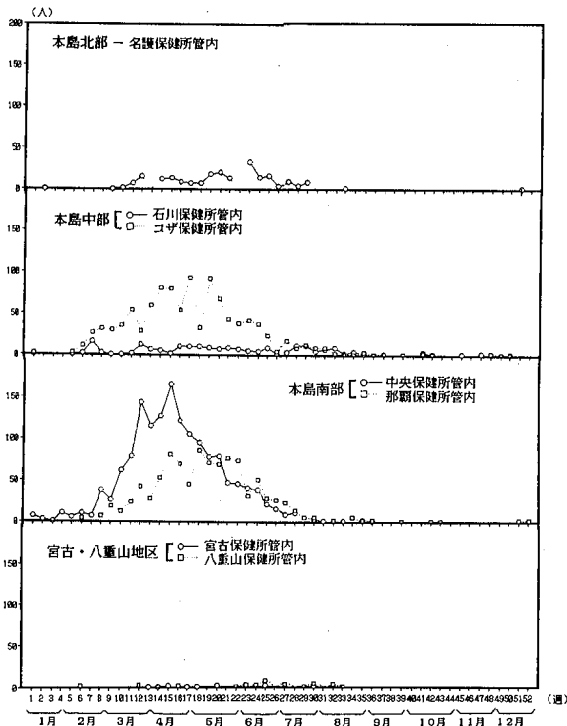


図 2 - 2 風しん

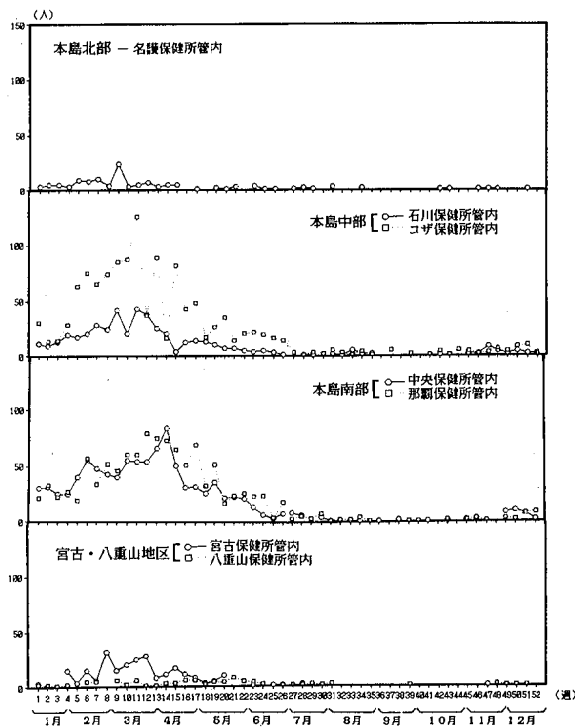


図 2 - 3 水痘

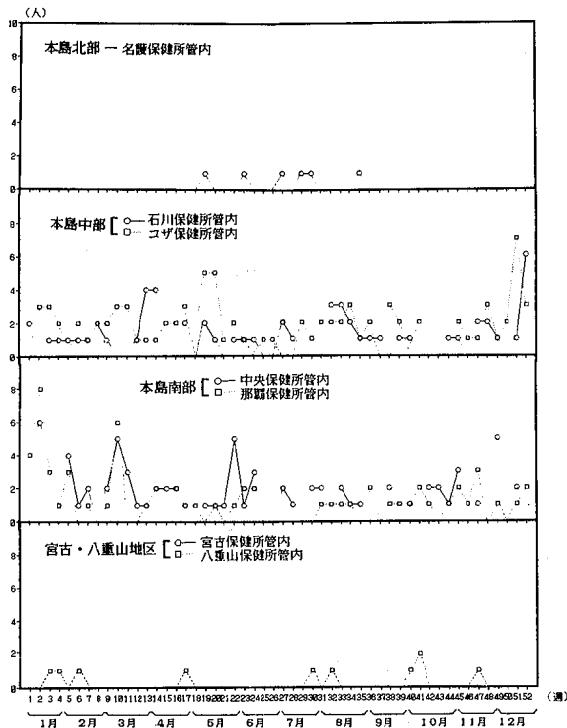


図 2 - 4 流行性耳下腺炎

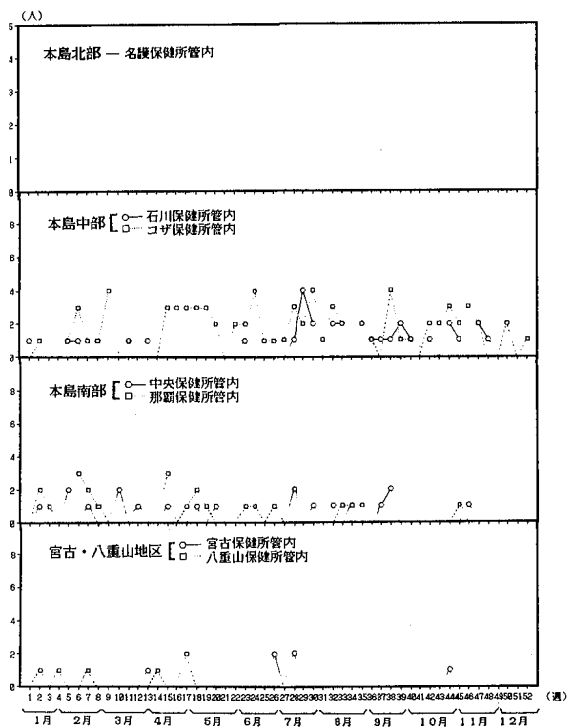


図 2 - 5 百日せき様疾患

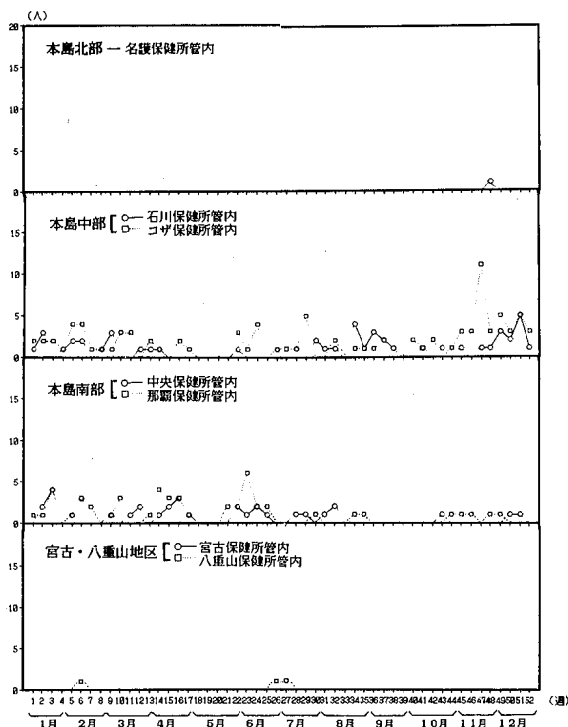


図 2 - 6 溶連菌感染症

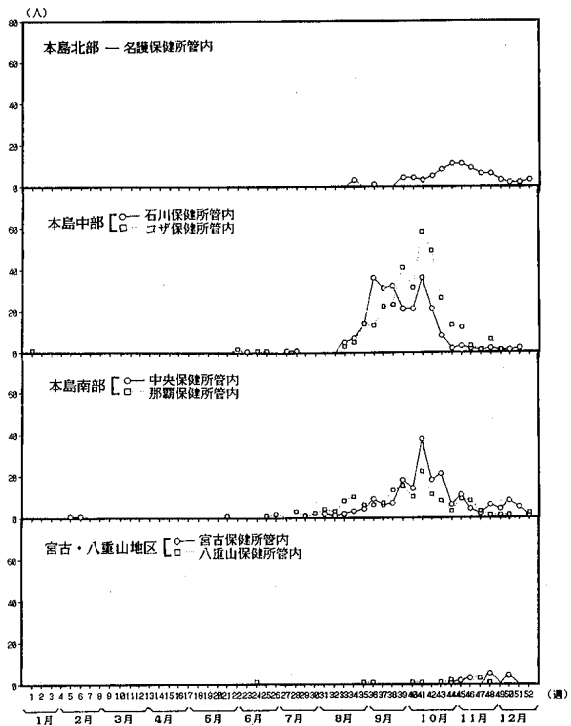


図 2 - 7 手足口病

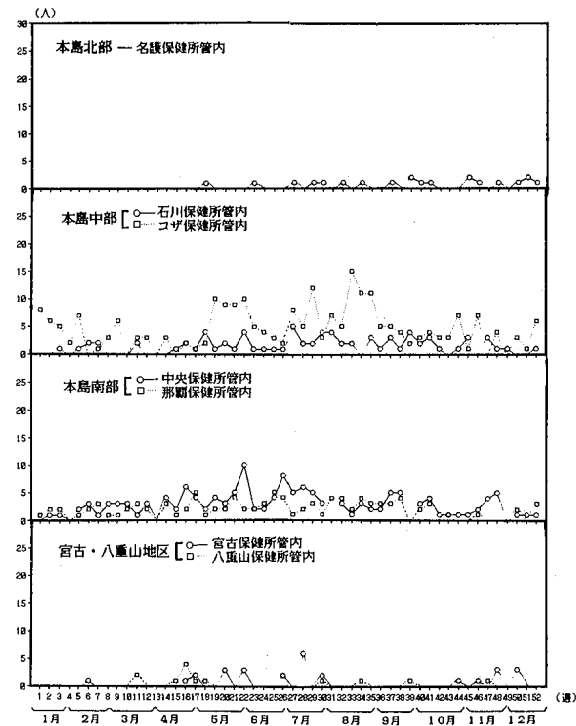


図 2 - 8 突発性発しん

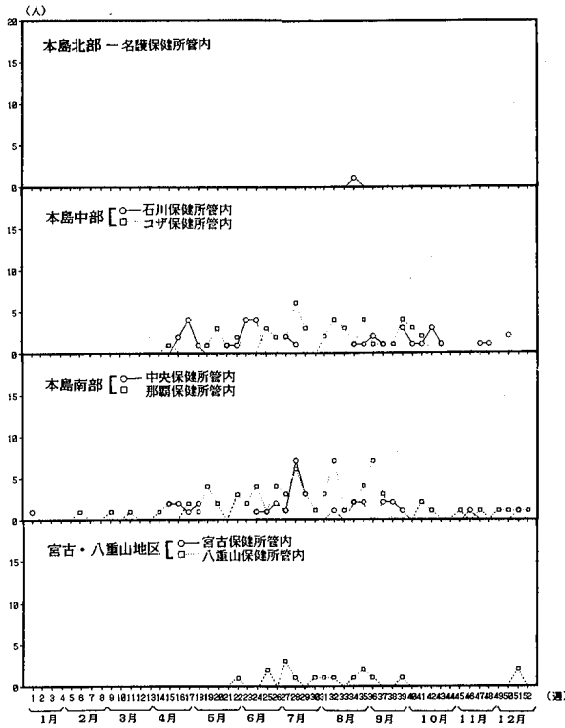


図 2-9 ヘルパングーナ

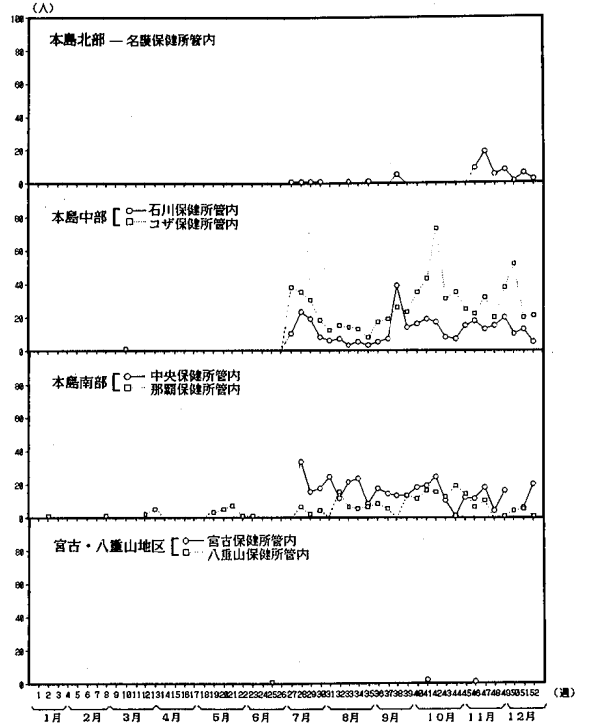


図 2-10 流行性角結膜炎

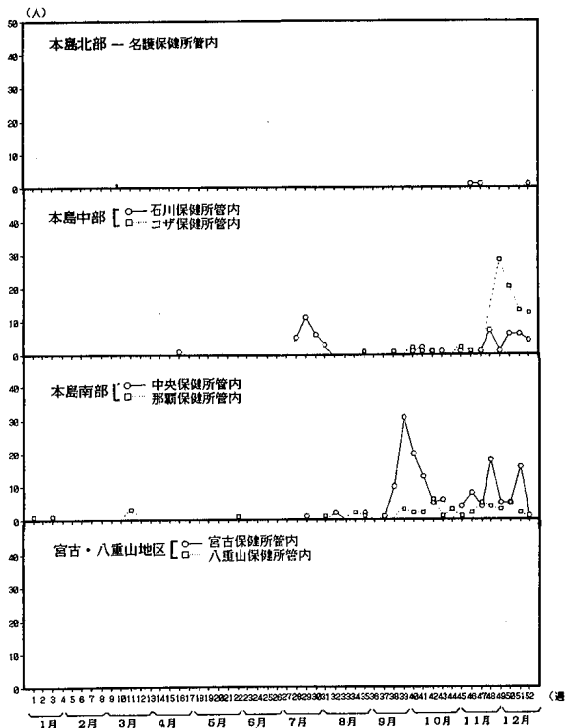


図 2-11 急性出血性結膜炎

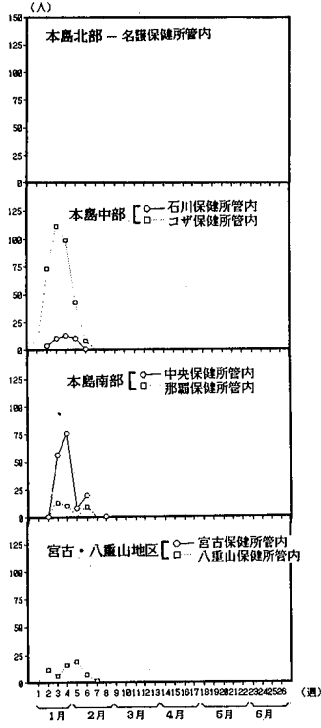


図 2-12 インフルエンザ様疾患

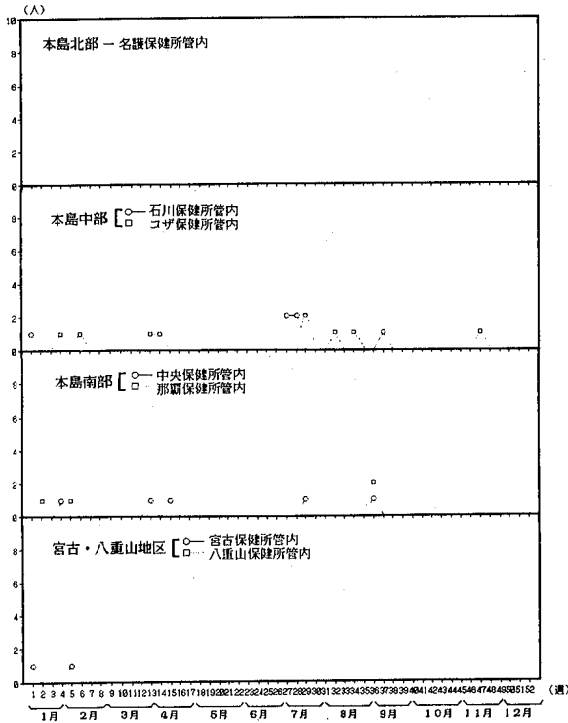


図2-13 川崎病

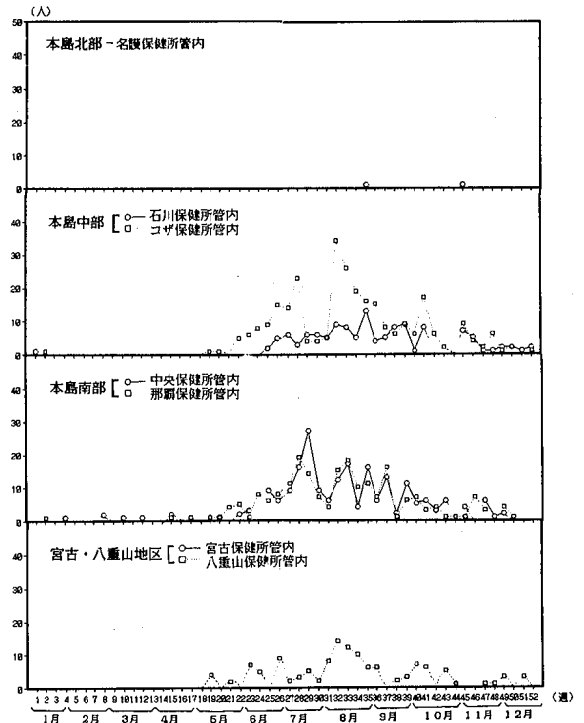


図2-14 伝染性皮膚疾患

図2 週別地域別患者発生状況

5 百日せき様疾患

本県では昭和56年9～11月、57年3月にやや大きな流行のピークがあったが、58年、59年と流行らしきものはみられない。

全国的にも流行らしきものはなく、本県でも1～12月まで本島北部を除く各地域で少人数の散発的発生であった(図1-5、2-5)。

年齢別にみると、1歳未満の割合が全国29.7%に比べ34.9%とやや多い(図3-5)。

6 溶連菌感染症

年中小規模ながら患者発生がみられるが、初夏と冬に流行のピークらしきものが見られるところは全国の傾向と似ている(図1-6)。

地域別にみると、主として本島中南部に患者発生がある(図2-6)。

年齢別にみると、1歳未満の割合が4.7%で、全国の0.9%より多い傾向にある。

7 異型肺炎

過去4年間で昭和58年の6～8月に小規模の流行らしきものがあったが、それ以外は一年を通じ

て散発的な発生で、全国平均に比べてもかなり少ない(図1-7)。

年齢別では5歳以上が70%以上を占め、1歳未満の患者報告はなかった。全国的にもほぼ同様の割合である。

8 乳児嘔吐下痢症およびその他の感染性下痢症

全国的に流行ピークは冬季にあるが、本県では1～2月に患者は多かったものの11～12月での患者報告は少なかった。

年齢別にみると、乳児嘔吐下痢症では全国とほぼ同じであるが、その他の感染性下痢症では1歳未満の占める割合が本県では高い。

9 手足口病

1958年に世界で初めて報告され、我が国では5年後の昭和38年に初めての報告がある新しい感染症で、コクサッキーAウイルス16型とエンテロウイルス71型の2種類が病原体といわれる。

本県では昭和59年の報告患者が1,038人で感染症サーベイランス対象疾病の中で5番目に多い疾病である。

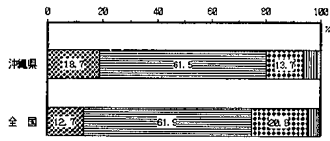


図3-1 麻しん様疾患

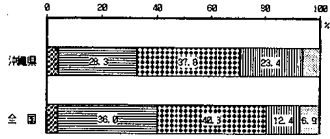


図3-2 風しん

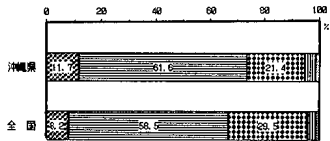


図3-3 水痘

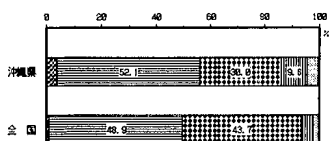


図3-4 流行性耳下腺炎

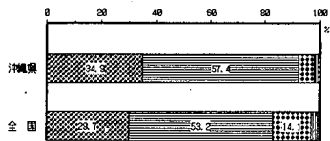


図3-5 百日せき様疾患

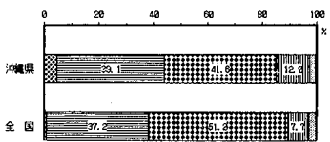


図3-6 溶連菌感染症

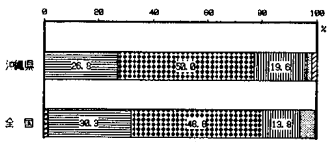


図3-7 異型肺炎

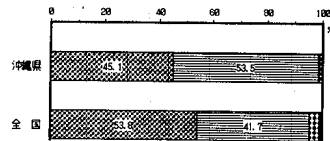


図3-8 乳児オウ吐下痢症

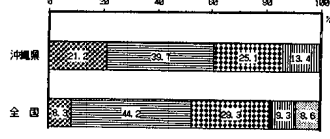


図3-9 その他の感染性下痢症

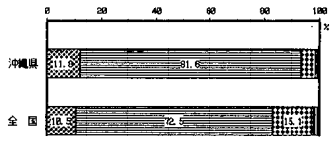


図3-10 手足口病

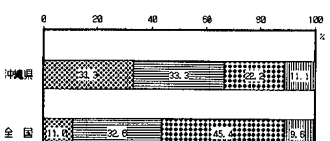


図3-11 伝染性紅斑

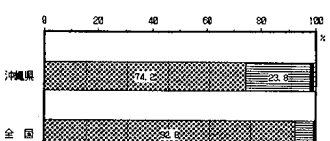


図3-12 突発性発しん

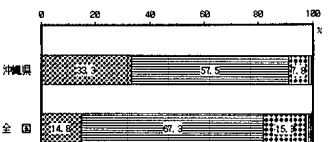


図3-13 ヘルパンギーナ

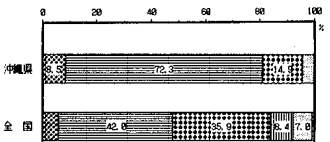


図3-14 咽頭性結膜炎

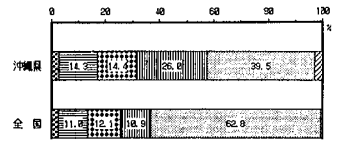


図3-15 流行性角結膜炎

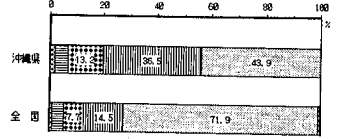


図3-16 急性出血性結膜炎

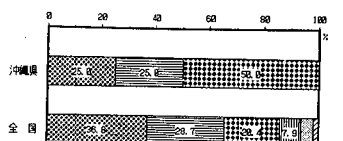


図3-17 細菌性髄膜炎

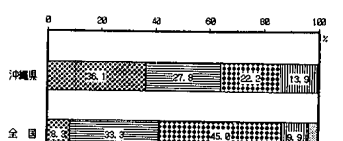


図3-18 無菌性髄膜炎

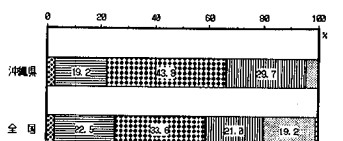


図3-19 インフルエンザ様疾患

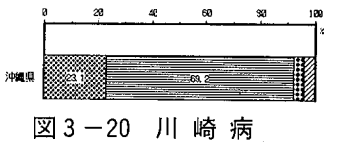


図3-20 川崎病



図3 年齢別患者発生割合

全国的には7月をピークとして6～8月に流行があるが、本県では10月をピークとして9～11月にかけて流行した。昭和56年の流行は6～8月で、57年が10～12月、58年が5～7月と1年おきにピークの移動を繰り返している。

全県下で患者発生報告があるが、なかでも本島中部地区に多い傾向があった(図2-7)。

年齢別では、1～4歳が81.6%と圧倒的に多く、全国とほぼ同様の結果である(図3-10)。

10 伝染性紅斑

報告のあった患者数は9人と少なく、昭和56年に256人の患者報告があったが、57年39人、58年11人と3年間流行は見られない。

11 突発性発しん

県内各地域で季節に関係なく発生し、一定点当りの患者数は全国平均よりやや少ない。

年齢別では4歳以下で98%を占め、1歳未満が78%である。

12 ヘルパンギーナ

全国的に各地域でかなり大きな流行があったが、本県では7月に43人の患者を報告したのがピークで流行は小規模であった。

八重山地区と本島中南部での発生が主で、年齢別には1歳未満の割合が33.3%と全国の14.8%より高い傾向にあった(図1-12、2-9)。

13 咽頭結膜熱

全国的には小規模ながら8～9月にピークがあったが、本県では6～7月に患者発生が多く、過去4年の流行パターンでは春先と夏期の2峰性のパターンを示している。

地域別では石垣市が17人と全患者数の1/3を占める。

年齢別では4歳未満が80.8%と全国48.0%に比べてはるかに多く、10歳以上が少ない(図3-14)。

14 流行性角結膜炎

7月から12月にかけて全国平均を大きく上回る流行があり、昭和59年の感染症サーベイランス対象疾病の中で、水痘、風しんに次いで3番目に患者数の多かった疾病である。昭和58年の患者報告数は475人となっているが、眼科定点が1ヶ所の数

字であり、実際の患者数は59年(眼科定点4ヶ所)より多かった。

地区別にみると、眼科定点のある本島中南部の患者発生が多く、眼科定点のない本島北部や宮古・八重山地区では流行はあったが患者報告数は少ない(図2-10)。

年齢別では全国と同様、15歳以上に多く、年齢が低くなるにつれて割合は少なくなっている。

15 急性出血性結膜炎

流行性角結膜炎と同じように昭和59年より58年の方が流行の規模は大きかったが、定点が1ヶ所から4ヶ所に増えたことで数字上は59年が多いように見える。本島中南部に患者発生が多く、眼科定点のない宮古・八重山地区からの報告はなかった。

16 髄膜炎

無菌性髄膜炎が全国的には7～8月に小規模ながら流行があったが、本県では、細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎とも散発的な発生で流行はなかった。

17 インフルエンザ様疾患

例年と同様1～2月に流行があったが、全国に比べ一定点当りの患者報告は小規模であった。流行株はB型が主であった。

18 ウイルス性肝炎

報告数(5人)が少なく、流行はみられなかった。

19 川崎病

未だ原因の判明しない疾病で感染症の疑いがあるが、疫学情報を得るため沖縄県では本事業の対象疾病として取り扱っている。

患者報告数は26人で、季節に関係なく発生しているように思われる。年齢別では1～4歳が69.2%と最も多く、1歳未満が23.1%で、26人中24人が4歳未満である。

20 その他

以上の疾患の他に、膿痂疹を主とし、毎年夏季に発生する「伝染性皮膚疾患」や原因のよくわからない「不明発疹症」等が沖縄県のサーベイランスの対象疾患となっている。なお、昭和59年の脳・脊髄炎の患者報告はなかった。